

アリアドネーの恐怖
—オウィディウス『名高き女たちの手紙』第 10 歌 79-98¹—
西井奨

1. 序論

オウィディウス『名高き女たちの手紙』第 10 歌（以下、*Her.* 10）は、アリアドネーがテーセウスに宛てた手紙、という形式の詩である。クレータの王女アリアドネーは、自分の兄弟でもある怪物ミーノータウロスを退治するためにやってきたテーセウスの手助けをする。そして彼と共に国を脱出するが、自らはナクソス（ディーア）島に置き去りにされてしまう。*Her.* 10 は、この段階でアリアドネーがテーセウスに戻ってくるよう訴えて書いた手紙という形をとっている。このような、テーセウスに見捨てられたアリアドネーの嘆きの描写は、オウィディウス以前ではカトゥッルス第 64 歌（以下、*Catul.* 64）に詳しく扱われており²、*Her.* 10 もこれに負うところが大きい。

Her. 10.79-98 でアリアドネーは、自分が捨てられたのが無人島であること³により、自らに降りかかるかもしれない恐怖の対象を挙げていく。この一節における 95: *timeo simulacra deorum* という表現は、どのようなことを意味しているのか分かり難く、削除案も含めてこれまでいくつかの解釈案が出されている⁴。*Her.* 10 は、アリアドネー自らの生死が主要な関心事となっている詩であるので⁵、おそらく自らに死をもたらす可能性のあるものを恐れていると考えられるこの表現の正確な理解は、*Her.* 10 全体を解釈する上で重要であると思われる。そこで本論稿では、この *timeo simulacra deorum* という表現を含む *Her.* 10.79-98 について改めて考察を施し、アリアドネーの恐怖の内容を特定する。

2. 『名高き女たちの手紙』第 10 歌 79-98⁶

{nunc ego non tantum quae sum passura recordor,
sed quaecumque potest ulla relictā pati.} 80
occurrunt animo pereundi mille figurae,
morsque minus poenae quam mora mortis habet.
iam iam uenturos aut hac aut suspicor illac,
qui lanient auido uiscera dente, lupos.
forsitan et fuluos tellus alat ista leones. 85
quis scit an et saeua tigride Dia uacet?
et freta dicuntur magnas expellere phocas!

¹ 本論稿は、第 7 回＜フィロロギカ＞研究集会（2008 年 10 月 25 日、於日本学士院）で行った報告に修正を加え、発展させたものである。当日の質疑応答から多くの貴重なご意見を賜った。この場を借りて謝意を表したい。

² *Catul.* 64.50-266.

³ *Her.* 10.59-62. cf. *Catul.* 64.184-5.

⁴ この表現に関する先行研究は、Volk, 348-50 に詳しくまとめられている。

⁵ Jacobson, 226, Verducci, 275, Smith, 252, Volk, 350.

⁶ 引用するテキストは、Knox を用いた。79-80 に削除記号を付すことや 85-6 における修正案に関しては、Knox, ad loc. および Dörrie の ap. cr. 参照。

quid uetat et gladios per latus ire meum?
 tantum ne religer dura captiua catena,
 neue traham serua grandia pensa manu, 90
 cui pater est Minos, cui mater filia Phoebi,
 quodque magis memini, quae tibi pacta fui!
 si mare, si terras porrectaque litora uidi,
 multa mihi terrae, multa minantur aquae.
 caelum restabat: timeo simulacra deorum. 95
 destituor rabidis praeda cibusque feris.
 siue colunt habitantque uiri, diffidimus illis:
 externos didici laesa timere uiros.

{今や私は、これから耐え忍ぶであろうことだけでなく、捨てられた女の誰もが耐え忍ぶはずのことを思います。} 心には千通りの死のかたがたが浮かびます。死を待つことよりも、死ぬことの方が苦しみは少ないのです。今にも、こちらからか、あちらからか、貪欲な牙で内臓を引き裂くような狼がやって来るのではと想像します。この土地なら褐色の獅子も育むかも知れません。ディーアには残忍な虎もいないと誰が分かるのでしょうか。海もまた巨大な海豹を打ち上げると言われています。そして「剣」⁷が私の脇腹を刺し貫くのを何が防いでくれるのでしょうか。捕らわれの身となって堅い鎖に繋がれるということだけにはなりませんように。また、隷属の手で大きな糸玉を紡ぐということがありませんように。私の父はミーノースで、母はポエブスの娘であり、より強く覚えていることですが、私はあなたと契りを交わしたのですから。海を見るたび、陸に延びた岸辺を見るたび、陸の多くが、海の多くが私を脅かします。空が残っていましたが、私は simulacra deorum を恐れます。私は獰猛な獣たちの餌食として見捨てられるのです。もし男たちが耕作をし、住んでいたとしても、私はその人たちを信じません。傷つけられて、異国の男たちを恐れることを学びましたから。

3. 「神々への恐怖」説

95: timeo simulacra deorum という表現において、特に deorum 「神々」に重点を置いた解釈がいくつかある。これらはいずれも、アリアドネーは神々を恐れているのだとするものである。

まず Knox は、simulacra deorum という表現は神殿などに置かれている「神々の彫像」という意味にしかかなりえないとし、アリアドネーは自らの国と家族を裏切ってテーセウスの手助けをしてしまったことから、本来祈る対象であるはずの神々の彫像を恐れているのだとする。そしてもちろんディーア島には神殿はないので、アリアドネーは自らが無人島にいることに思い至るのだと説明する⁸。これは simulacra を “An image, statue (usually of a god)”⁹ とするものである。確かに simulacra deorum という表現はセットフレーズとして

⁷ この 88: gladios 「剣」についても解釈が分かれている。これについては本論稿第 6 章第 2 節で論じる。

⁸ Knox, ad loc.

⁹ OLD s. v. 3a.

「神々の彫像」という意味を表すことが圧倒的に多い¹⁰が、ここでアリアドネーが彫像に言及するというのは唐突過ぎると思われる。

また Palmer は、この表現を含む 93-6 は真正でないと思われると ap. cr. で述べながらも、*simulacra deorum* を “probably phantoms, supposed divine, seen by Ariadne hovering in the air”¹¹ と解釈している。これは *simulacra* を “a ghost, phantom; a phantom object”¹² とするものである。なおマクシムス・プラヌーデースによるギリシア語訳では、この箇所を ἀλλὰ δέδοικα τὰ τῶν θεῶν εἰδῶλα と訳しており、*simulacra* の訳語に εἰδῶλα を用いていることから、プラヌーデースも Palmer と同様の解釈をしているのだと思われる¹³。この解釈に基づいて 95: *timeo simulacra deorum* を訳すなら、「私は神々の幻影を恐れます」というようになるだろう。ここでは「神々の幻影」、すなわち結局は神々そのものを恐れているということである。

Palmer はアリアドネーがなぜここで神々を恐れるのかということについては言及していない。これについては、*simulacra deorum* をおそらく Palmer と同様に解釈していると思われる Marg と Stégen が、アリアドネーは兄弟であるミーノートウロス殺しの手助けをしてしまったことにより、神々から罰を受けるのではないかとして神々を恐れているのだ、と説明している¹⁴。

一方 Volk は、*simulacra* をルクレーティウスの理論における *simulacra* だと捉える¹⁵。すなわち、*simulacra* を “(in Epicurean philosophy) the εἰδῶλον or image which emanates from an object and, impinging on the eye, causes sight.”¹⁶ であるとする。そうして Volk は、アリアドネーの抱く死への恐怖について、エピクーロス派の思想から解釈し、*simulacra deorum* は *Her.* 10 全体に通じる subtext であるとする。Volk のこのような解釈の是非はさておき、いずれにせよ Volk も 95: *timeo simulacra deorum* という表現を、アリアドネーの「神々への恐怖」と捉えているのは確かである¹⁷。

これら、「神々への恐怖」説の問題点は、続く 96: *destituor rabidis praeda cibusque feris*。「私は獰猛な獣たちの餌食として見捨てられるのです。」という表現と内容の繋がりが悪くなることである。確かに、「兄弟殺しの手助けをしたこと」による神々からの罰として、「獣たちの餌食になる」ということは考えられるかもしれない。しかしそうだとした場合、95 と 96 の間には飛躍がありすぎるように思われる。

¹⁰ e.g. Ovid. *Met.* 10.694, Liv. 45.27.9, Cic. *Cat.* 3.19.

¹¹ Palmer, ad loc.

¹² OLD s. v. 4b.

¹³ しかし、この εἰδῶλα にも別の解釈の余地が残されている。これについては次章で論じる。

¹⁴ Marg, 506, Stégen, 360. 両者ともここでは *timeo simulacra deorum* を「神々を恐れる」という内容で捉えているが、*simulacra* という単語自体の意味については明言していない。

¹⁵ Volk, 350-2.

¹⁶ OLD s. v. 4c.

¹⁷ Volk, 350: “the simulacrum in general implies the notion of ‘image’ or ‘likeness’, which does not seem fitting since Ariadne, we assume, is afraid of the god themselves and not their pictures.” なお、Armstrong は *simulacra deorum* を “images of the gods” としながらも、mysterious な表現であるとして特に深い考察はしていない (Armstrong, 223)。

Marg は、このような 95 と 96 の繋がり of 悪さを解決するため、95 の後に lacuna を想定している¹⁸。しかしこの想定は、当該箇所の文脈の考察の足りない、場当たりの方策という感が否めない。

Volk は、lacuna の想定には反対し、このような繋がり of 悪さをアリアドネーの心理状態の乱れに帰する。Volk は以下のように主張する。
 “I, for one, am happy to ascribe the disjunction to Ariadne’s state of mind: in her terror, the heroine moves quickly from fear to fear. Given that the gods present the most terrifying and unfathomable of dangers, she finds herself unable to dwell on the topic for long, and we could thus interpret her failure to further elaborate on it as a kind of *aposiopesis*.”¹⁹。ここで Volk は、95 から 96 で唐突に話題が変わるのは *aposiopesis*「頓絶法」の一種であるとするのであるが、その原因をアリアドネーの心の乱れのせいにするのは大きな問題があると思われる。このように、話題の唐突な変化や文脈の飛躍を語り手の心理状態の乱れのせいにするような解釈が許されるなら、1 人称の詩における内容の不明瞭な箇所は全てこれで説明することができるようになる。これでは、およそ文学研究・文献学研究自体が意味をなさなくなるのではないだろうか。

4. 「星座への恐怖」説

次いで、95: *timeo simulacra deorum* の解釈として挙げられるのが、*simulacra* を“an image formed by the stars of constellation”²⁰、すなわち「星座」とする解釈である。この解釈には、Hewig や Battistella が論じるように、まさにアリアドネーは星座を恐れているのだとするものと²¹、Barchiesi が論じるように、アリアドネーの神話の背景から、*simulacra* は「星座」を暗示しているのだとするものがある²²。ここではまず、Barchiesi の説から論じる。

アリアドネーは、テーセウスに見捨てられた後、バックス（ディオニューソス）に娶られて救われることになる。その後、彼女の冠もしくは冠と共に彼女もバックスによって星座になったということが伝えられている²³。Barchiesi はこのようなアリアドネーの神話の背景から、*Her. 10.95: caelum restabat: timeo simulacra deorum.* という表現において、*caelum* との関連で *simulacra* は「星座」をも意味し、将来自らが星座となることを暗示しているのだとする。Barchiesi は、ここでの *simulacra* が「星座」を暗示するための例証として、オウィディウスの作品から、『変身物語』（以下、*Met.*）第 1 巻 73・第 2 巻 194・ラクタンティウス『神教的教理』第 2 巻第 5 章に引用される『パイノメナ』断片を引用する²⁴。Barchiesi はこれらを、*deorum* が星座

¹⁸ Marg, 506.

¹⁹ Volk, 349.

²⁰ OLD s. v. 2c.

²¹ Hewig, 555-6, Battistella, 219-21.

²² Barchiesi(2001), 18-25(初出は 1986 年), Id.(1989), 173-4.

²³ Prop. 3.17.7-8, Ovid. *Her.* 6.115-6, A. A. 1.525-64, *Met.* 8.169-81, *Fast.* 3.459-516. なお、アリアドネーの冠の星座についての考察は Armstrong, 312-6 参照。

²⁴ Ovid. *Met.* 1.73: *astra tenent caeleste solum formaeque deorum.*, *Met.* 2.194: (Phaethon) *uastarumque uidet trepidus simulacra ferarum.*, fr. 7(*Phaenomena*). 1-2: *toto numero talique deus simulacra figura / imposuit caelo...*

に関連する例と、*simulacra* がまさに「星座」の意味で用いられている例であるとする²⁵。

さらにアポッローニオス・ロディオス『アルゴナウティカ』(以下、*Ap. Rh.*) の以下の箇所との対応も指摘する²⁶。

... τὴν δὲ καὶ αὐτοὶ
ἀθάνατοι φίλαντο, μέσφ δέ οἱ αἰθέρι τέκμαρ
ἀστερόεις στέφανος, τὸν τε κλείουσ' Ἀριάδνης,
πάννυχος οὐρανίοισιν ἐλίσσεται εἰδώλοισιν. (Ap. Rh. 3.1001-4)

そして彼女(アリアドネー)を、不死なる神々さえ愛しました。天の中央にこの証として星の冠が — 人々はそれをアリアドネーの冠と呼んでいます — 一晩中空の星座の間を巡っています。

この 1004: *εἰδῶλοισιν* において、*εἰδῶλον* が「星座」の意味で用いられている²⁷ことから、*Her.* 10.95 における *simulacra* とパラレルをなすとする。なお、この対応を考慮に入れると、プラヌーデースのギリシア語訳で用いられた *εἰδῶλα* も「星座」を暗示し得るものといえよう。

このように Barchiesi は、95: *simulacra deorum* は「星座」を暗示すると主張するが、95: *simulacra deorum* の字面の表現そのものが辞書的に何を意味しているかということについては明言することを避けている²⁸。ただし、86: *tigris* 「虎」を、アリアドネーを娶りに来たバックスの乗る車を曳いている虎²⁹と関連させ、この 95: *simulacra deorum* を含む一連の表現によって、アリアドネー自身は気付かないながらも、バックスが彼女のところに来つつあるのをアイロニカルに示している³⁰ののだとしている³¹。

Her. 10.95 におけるこのような解釈の仕方は、Barchiesi によって提唱されてから、近年広く支持されているようである³²。しかし、Barchiesi による *simulacra deorum* が「星座」を暗示しているという解釈は、ラテン語の語法の面からも曖昧さが残っている。この曖昧さを批判し、*Her.* 10.95 の *simulacra* が「星座」を意味するということを新たな形で提言したのが Battistella である。

²⁵ Barchiesi(2001), 23.

²⁶ Barchiesi(1989), 173.

²⁷ cf. *LSJ* s. v. V.

²⁸ Barchiesi はアリアドネーが兄弟殺しの手伝いをしたせいで神々からの罰を恐れるという状況には納得しつつも、*simulacra deorum* については、“enigmatic reference” であるとし、“divine apparitions” を示すことはなく、普通は「神々の影像」を示すものであり、おそらくアリアドネー自身、自らが何を恐れているのか分かっていない、としている (Barchiesi(2001), 23)。

²⁹ Ovid. *A. A.* 1.549-50: iam deus (sc. Bacchus) in curru, quem summum texerat uvis, / tigribus adiunctis aurea lora dabat.

³⁰ いわゆる dramatic irony. cf. *Catul.* 64.249-64.

³¹ Barchiesi(2001), 24-5.

³² Rosati, ad loc., Salvadori, ad loc., Landolfi, 110, Jolivet, 214, n. 74, Paolicchi, ad loc. 一方、*simulacra deorum* が「星座」を含意せず、単純にバックスを示すという解釈は Barchiesi 以前からある。cf. Marg, 506, Verducci, 275, Spoth, 91, n. 31, 160, Häuptli, ad loc. しかし、Jacobson は *Her.* 10 においてバックスへの言及やほのめかしは作品の性質上ありえないとする (Jacobson, 226-7)。

Battistella は Barchiesi の引用する *Met.* 1.73: *formaeque deorum* は単に「神々」そのものの表現しているだけであるととし、*simulacra deorum* が「神々の星座」を意味する根拠にはならないとする。それではアリアドネーは、*Met.* 1.73 の内容から、「神々の住む場所」を恐れているのかとしても、*deorum* を属格でそのような意味でとるのは困難であるとする。そのうえで Battistella は、*Her.* 10.95: *caelum restabat* が *Ap. Rh.* 3.1002: ἄθάνατοι φίλαντο と対応するものとし、*simulacra deorum* を“constellazioni di cui gli dei fanno dono”³³と解釈する。すなわちアリアドネーは「神々が自分を星座にすること」を恐れている、とする。しかしこの解釈では、Battistella 自身も言及しているように、「何故自身が星座になることをアリアドネーは知っているのか」という問題が生じるといえよう。また、Barchiesi も Battistella も、95 に続く 96 との繋がり of 悪さの問題については解決策を与えていない。

一方、Hewig の主張は、*simulacra deorum* を「神々の星座」としたうえで、96 および 97-8 との繋がりを良くしようとする解釈案である。すなわち、95 で「神々の星座」に言及した後、そのままアリアドネーは視点を空の星座に移し、96 では獣たちの星座を、97-8 では人間の星座を恐れているとするのである³⁴。確かにこの解釈案に従えば、95 と 96 の繋がり of 悪さの問題は解決する。しかし、これはあまりにも唐突過ぎるように思われる³⁵。

なお、Hewig の解釈のように、95 に続く 96 でアリアドネーは獣たちの星座を恐れていると解釈するならば、95: *simulacra deorum* を、*Met.* 2. 194 の表現³⁶も踏まえて、*simulacra ferarum* と修正することも可能であろう³⁷。しかしこのように修正しても、やはりここでアリアドネーが星座の獣たちを恐れるのには唐突さが残る。

5. 削除案

Dörrie が *ap. cr.* でも書き記しているように³⁸、この *Her.* 10.95 を含んだ前後の行には、多くの形で削除案が出されている³⁹。なかでも、最も妥当だと思われるのが、行の *transposition* も想定する Tarrant

³³ Battistella, 221.

³⁴ Hewig, 556.

³⁵ 実際、Volk はこの Hewig の主張を受け入れがたいものであると述べている (Volk, 350, n. 13.). Barchiesi と Battistella は Hewig に言及すらしていない。ただし、もし *Arat. Phaen.* 71-3: Αὐτοῦ κακείνος Στέφανος, τὸν ἀγαθὸν ἔθηκεν / σήμ' ἔμεναι Διόνυσος ἀποικομένης Ἀριάδνης, / νῶτ' ὑποστρέφεται κεκμηότος εἰδώλοιο. の εἰδώλοιο と *simulacra* との対応を想定するなら、Hewig の主張を支持する要素にはなるかもしれない。cf. Ovid. *Met.* 8.182.

³⁶ テキストは本論稿注(24)参照。

³⁷ ただし、この *deorum* の代わりに *ferarum* と読む写本がどうやら既に存在するらしい。Burmman et al., *ad loc.* や Valpy, *ad loc.* が Gronovianus 写本にそう記されていると述べている。しかし、この写本は Dörrie による浩瀚な写本資料を利用した校訂本にも現れておらず、Palmer 以降でこの読みについて言及した者は誰一人として見当たらない。Palmer, *ad loc.* は Burmann のコメントを引用しているにもかかわらず、この読みについては言及していない。

³⁸ Dörrie, 145: “An genuini sint vv. 94/5 multi dubitaverunt;”

³⁹ これまでの削除案の詳細は、Tarrant, 74, Reeve, 332 参照。

の案である⁴⁰。Tarrant は 88 と 93-5 を“can hardly be Ovidian because of inanity of content or incompetence of expression or both;”⁴¹として削除する。さらに 89-92 は瑕疵のない表現でありながらも、この位置では文脈にそぐわないとし、98 の後に移動させる。このような処置を施したテキストは以下ようになる⁴²。

iam iam uenturos aut hac aut suspicor illac,
 qui lanient auido uiscera dente, lupos.
 forsitan et fuluos tellus alat ista leones. 85
 quis scit an et saeua tigride Dia uacet?
 et freta dicuntur magnas expellere phocas! 87
 destituor rabidis praeda cibusque feris. 96
 siue colunt habitantque uiri, diffidimus illis:
 externos didici laesa timere uiros. 98
 tantum ne religer dura captiua catena, 89
 neue traham serua grandia pensa manu, 90
 cui pater est Minos, cui mater filia Phoebi, 91
 quodque magis memini, quae tibi pacta fui! 92

今にも、こちらからか、あちらからか、食欲な牙で内臓を引き裂くような狼がやって来るのではと想像します。この土地なら褐色の獅子も育むかも知れません。ディアーには残忍な虎もいないと誰が分かるでしょうか。海もまた巨大な海豹を打ち上げると言われています。私は獰猛な獣たちの餌食として見捨てられるのです。もし男たちが耕作をし、住んでいたとしても、私はその人たちを信じません。傷つけられて、異国の男たちを恐れることを学びましたから。捕らわれの身となって堅い鎖に繋がれるということだけにはなりませんように。また、隷属の手で大きな糸玉を紡ぐということがありませんように。私の父はミーノースで、母はポエブスの娘であり、より強く覚えていることですが、私はあなたと契りを交わしたのですから。

このような処置によって、問題の箇所は、「獣たちへの恐怖 (83-87,96)」から「人がいた場合の恐怖 (97-8, 89-92)」というように、文脈上自然な流れの表現になる⁴³。

さらに付け加えるなら、このような *transpositon* を想定した処置は続く 99 以下との繋がりも良くする。というのも 99 以下では、

uiueret Androgeos utinam! nec facta luisses
 impia funeribus, Cecropi terra, tuis;
 nec tua mactasset nodoso stipite, Theseu,
 ardua parte uirum dextera, parte bouem; (Ovid.*Her.*10. 99-102)

⁴⁰ Tarrant, 73-5.

⁴¹ Tarrant, 74.

⁴² 便宜上、Knox のテキストに Tarrant の処置を適用する。

⁴³ なお、この Tarrant の処置は、Peters の処置と全く同じである (cf. Peters, 28-30, Hewig, 555, n. 3)。Tarrant は Peters に言及していないし、Peters の提案に触れる Hewig も Tarrant に言及していない。

アンドロゲオースが生きていればよかったのです。ケクロプスの土地よ、それならばお前は不敬な所業を同胞の死で贖うこともなかったでしょう。テーセウスよ、こぶだらけの棍棒を持ってあなたが振り上げた右手も、半ば人間、半ば牡牛の怪物を屠ることはなかったでしょう。

と続き、兄であるアンドロゲオースへの言及と 91 での両親への言及が、親族という点で関連性を持つからである。このことから、Tarrant の考える *transposition* の想定は妥当性を持つといえよう⁴⁴。

6. *simulacra deorum* 再考察

6.1. *transposition* の想定と文脈からの検討

Tarrant の提案する *transposition* の想定は *Her.* 10.79-98 の表現内容を自然な文脈の流れに沿ったものになっているという点で極めて有益である。そこでこのような *transposition* があったとしたうえで、文脈の整合性という視点から *Her.* 10.79-98 を再度検討すると、Tarrant が削除することを主張する 88, 93-5 も削除する必要がなくなるのではないだろうか。

実際、本論稿第 3 章・第 4 章で考察したように、これまでの *Her.* 10.95 前後の解釈案は「文脈にそぐわないこと」が最大の問題点であった。これまでの解釈案は、*simulacra deorum* という字面の意味にあまりにも囚われすぎていて、文脈からの考察が疎かだったからだといえよう。しかし、Tarrant による *transposition* の想定は、問題の箇所文脈の整合性を良くする一助となるものである。そこで本章では、88, 93-5 とその前後の解釈について文脈という視点を基軸に考察し、*simulacra deorum* という表現についても新たな解釈案を提示する。

6.2. *Her.* 10.88: *gladios* の解釈

Tarrant が削除を主張する、88: *quid*⁴⁵ *uetat et gladios per latus ire meum?* 「そして「剣」が私の脇腹を刺し貫くのを何が防いでくれるのでしょうか。」においては、*gladios* 「剣」が一体何なのか、誰の剣なのか、という疑問が持たれている⁴⁶。この *gladios* は海賊の剣であるという解釈がある⁴⁷が、これは明らかに、この箇所以前の、

*quid faciam? quo sola ferar? uacat insula cultu.
non hominum uideo, non ego facta boum.
omne latus terrae cingit mare; nauita nusquam,*

⁴⁴ なお、写本伝承過程においてどうしてこのような *transposition* が生じたかということについては、Tarrant も Peters も論じていない。

⁴⁵ Tarrant は *quis* と読む。

⁴⁶ Barchiesi はこの疑問を提示しながらも、自らの意見は述べていない (Barchiesi(2001), 21)。

⁴⁷ Palmer, ad loc., Knox, ad loc., Paolicchi, ad loc.

nulla per ambiguas puppis itura uias. (Ovid. *Her.* 10. 59-62)

私はどうしたらいいのでしょうか。一人でどこへ行けばいいのでしょうか。島に集落はなく、人や牛のいる気配はありません。大地の側面全てを海が取り囲んでいます。水夫はどこにもいません。不確かな航路を通して進む船もありません。

という内容⁴⁸と矛盾する。Knox と Paolicchi は、88 に続く 89-90 の「捕らわれの身になる」という内容との関連から、88: *gladios* は海賊の剣であると主張するが、本章においては Tarrant による *transposition* の想定のもとに考察を進めるので、この説は採用できない。ここではむしろ、同じ *distich* 内である 87: *et freta dicuntur magnas expellere phocas!*「海もまた巨大な海豹を打ち上げると言われています。」との関連から解釈すべきであろう。

そこで考えられるのが、88: *gladios* を *swordfish*、すなわちカジキとする解釈である⁴⁹。Hewig は大プリーニウス『博物誌』の以下の記述を指摘する⁵⁰。

Trebius Niger xiphian, id est gladium, rostro mucronato esse, ab hoc naues perfossas mergi; (Plin. *N. H.* 32.15)

クシピアス、すなわち剣魚は鋭い嘴を持っており、船はこれに突き刺されて沈められる、とトレビウス・ニゲルは言う。

このように *swordfish* の危険性は古典古代から知られており⁵¹、海豹と同様に海に棲む生物を恐れる⁵²という点でも、88: *gladios* は *swordfish* と解釈するのが妥当であろう。ここでは *gladius* の原義に従って「剣魚」と訳す。

6.3. 「鳥」の可能性

6.3.1. 空の生物を恐れるという文脈から

87-8 でアリアドネーは海の生物を恐れているので、83-6 で陸の獣を恐れていることを考慮に入れると、続く 93-4: *si mare, si terras porrectaque litora uidi, / multa mihi terrae, multa minantur aquae.*「海を見るたび、陸に延びた岸辺を見るたび、陸の多くが、海の多くが私を脅かします。」における内容は辻褄のあうものとなる。そのうえでアリアドネーは、95: *caelum restabat: timeo...*と、「空」にいる何かを恐れるわけである。そして 96: *destituor rabidis praeda cibusque feris.*「私は獐猛な獣たちの餌食として見捨てられるのです。」と続く。このように陸の生物(83-6)・海の生物(87-8)を恐れた後で、自らが餌食にされてしまうような「空」にいる何かを恐れるわけ

⁴⁸ cf. Catul. 64.184-5: *praeterea nullo colitur sola insula tecto, / nec patet egressus pelagi cingentibus undis.*

⁴⁹ Reeve, 332, Hewig, 555.

⁵⁰ Hewig, 555.

⁵¹ 当時の *swordfish* の知識については、Thompson(1947), 178-80 参照。

⁵² なお、海豹を恐れることについては、Barchiesi(2001), 24, n. 35 参照。

であるから、95: *timeo* の後には、「鳥」、とりわけ人を襲いうるような猛禽類の鳥を意味する言葉が来るのが文脈上妥当ではないだろうか。

ただしここで、95: *caelum* は星や神々が存在する「天」ではないのかと思われるかもしれない⁵³。しかし、*caelum* は文脈に応じて、神々の住む *the upper air* である *aether* 「天」の意味にも、それより下層の、*the lower air* である *aer* 「空」の意味にもなりうるのである⁵⁴。

例えば、クレータ島から脱出しようとするダイダロスは⁵⁵、次のように述べる。

...*'terras licet' inquit 'et undas
obstruat, at caelum certe patet; ibimus illac!
omnia possideat, non possidet aera Minos.'* (Ovid. *Met.* 8.185-7)
ダイダロスは言った。「ミーノースが陸と海を封鎖していようと、空が開いているのは確かだ。そこから脱出しよう。ミーノースは全てを領有していようと、空は領有していない。」

ここでは、明らかに *caelum* は *aer* と同じ意味で用いられている。ここでは陸・海との対比から、自らの採りうる脱出経路として、*caelum* を「空」の意味にさせているといえよう。また、陸・海との対比で *aer* が用いられる例もあり、これは以下の *Her.* 6 のヒュプシピュレーの言葉に見られる⁵⁶。ここで彼女は嫉妬相手であるメーデイアを呪う。

cum mare, cum terras consumpserit, aera temptet; (Ovid. *Her.* 161)
(メーデイアは) 海にも陸にも逃げ場をなくし、空に逃げようと試みますように。

この例からも、*Her.* 10.95: *caelum restabat* は *aer restabat* と同義であるといえよう。このことから、*caelum* との関連で、必ずしも *simulacra deorum* が「星座」を想起させるものではないといえる。Barchiesi は *Met.* 1.73 を根拠に *simulacra deorum* は「星座」を暗示するとした⁵⁷が、実際、*Met.* 1.73-5 においては、

astra tenent caeleste solum formaeque deorum,

⁵³ cf. Ovid. *Met.* 1.73. テキストは本論稿注(24)参照。

⁵⁴ 便宜上、*aether* を「天」、*aer* を「空」と訳す。

⁵⁵ ダイダロスは海においても陸においても逃げ道を見出せず、空を脱出経路と考える。このような状況は、陸・海を恐れた後、空に視点を移すアリアドネーの状況との類似性がある。cf. Burmann et al., ad loc., Palmer, ad loc., Reeve, 332, n. 1, Barchiesi(2001), 22-3. Ovid. *A. A.* 2.35-8: *possidet et terras et possidet aequora Minos: / nec tellus nostrae nec patet unda fugae. / restat iter caeli: caelo temptabimus ire. / da ueniam coepto, Iuppiter alte, meo.*

⁵⁶ なお、ダイダロスとヒュプシピュレーは奇しくもアリアドネーと物語上での関連性を持つ。ダイダロスは彼女に糸玉の策を教えた本人であり (Apollod. *E.* 1.8-9)、ヒュプシピュレーはアリアドネーとバックスの孫である。

⁵⁷ 本論稿第4章参照。

cesserunt nitidis habitandae piscibus undae,
terra feras cepit, uolucres agitabilis aer. (Ovid. *Met.* 1.73-5)
星と神々が天の土地を領有し、海はつやつやとした魚たちに住むべき場所を与え、陸は獣たちを、移り変わり易い空は鳥たちを受け入れた。

というように、*caeleste solum* (≡ *caelum*) が神々の住む *aether* の意味で用いられている一方で、鳥の住む場所として *aer* が言及されており、*Her.* 10.95 の *caelum* はこの *aer* と同義であると解釈するのが妥当であろう⁵⁸。

それでは果たして、*Her.* 10.95: *simulacra deorum* という表現は「鳥」を意味しうるのだろうか。

6.3.2 . 神の変身した姿から

ここでまず、*simulacra* の意味を、第一義である “That which resembles something in appearance, sound, etc., a likeness.”⁵⁹ とする。そして *simulacra deorum* の訳を「神々の似姿」もしくは「神の似姿」⁶⁰ とする。ここから、「神が変身した姿」として *simulacra deorum* が「鳥」を表していると解釈することはできないだろうか。というのも、鳥は鳥占いによる予言などを通じて神々と近縁性がある⁶¹ だけでなく、神々自体がしばしば鳥に変身するからである。例えば、『オデュッセイア』において、

ὥς ἄρα φωνήσας' ἀπέβη γλαυκῶπις Ἀθήνη
φήνη εἰδομένη: ... (Hom. *Od.* 3.371-2)
こう言い終わると、眼光り輝くアテーネーは髭鷲⁶²の姿となって飛び去った。

というように、アテーネーは髭鷲に変身する。またユピテル（ゼウス）も、自分の聖鳥である鷲に変身してトロイアの少年ガニューメデースをさらったという話もよく知られている⁶³。この話は以下の記述から窺える。

Αἰετὸς ὁ Ζεὺς ἦλθεν ἐπ' ἀντίθεον Γανυμήδην, (A. P. 5.65.1 (Anon.))
ゼウスは鷲の姿で、神にも等しいガニューメデースのもとへ来た。

⁵⁸ なお、Barchiesi が引き合いに出した、パエトーンが見た *simulacra ferarum*（本論稿注(24)参照）は、*aether* での出来事だったといえる。cf. Ovid. *Met.* 2.178-9: *ut uero summo despexit ab aethere terras / infelix Phaethon ...*, Lucr. 5.397-8: *auia cum Phaethonta rapax uis solis equorum / aethere raptauit toto terrasque per omnis.*

⁵⁹ OLD s. v. 1.

⁶⁰ ここで「神々の」でなく「神の」とするのは poetic plural の可能性を含めているからである。これについては後述する。

⁶¹ cf. Ar. *Av.* 716-22, Ovid. *Fast.* 1.445-8.

⁶² 「髭鷲」の訳語は Thompson(1936), 303 に従う。

⁶³ この話には、ゼウス本人がさらうバージョンと、使いの鷲にさらわせるバージョンもある。これについては、高橋, 36-40 参照。

μηδέ μοι οἰνοχόον κυλίκων σέθεν αἰετὸς ἀρθεῖς
 μάρψαις ἀντὶ καλοῦ, κοῖρανε, Δαρδανίδου. (A. P. 12.64.3-4 (Alc.))
 支配者ゼウスよ、高みから鷲の姿で私の杯の酌人を、美しいガニユ
 メーデースの代わりに連れ去らないでください。

Εἰ Ζεὺς κείνος ἔτ' ἐστὶν ὁ καὶ Γανυμήδεος ἀκμὴν
 ἀρπάξας ἔν' ἔχη νέκταρος οἰνοχόον,
 πῇ μοι τὸν καλὸν ἐστὶν ἐνὶ σπλάγχνοισι Μυῖσκον
 κρύπτειν, μή με λάθῃ παιδὶ βαλὼν πτέρυγας; (A. P. 12.65 (Mel.))
 もしゼウスがいまだ、ネクターの酌人にするために若さの盛りのガ
 ニユメーデースを奪い去ったような男であるのなら、私の美しいミ
 ユイスコスを胸の中に隠すにはどうすればいいだろう。ゼウスが私
 に気付かれずに、この子に翼を投げつけないようにするために。

... nulla tamen alite uerti
 dignatur, nisi quae posset sua fulmina ferre.
 nec mora, percusso mendacibus aere pennis
 abripit Iliaden, ... (Ovid. Met. 10.157-60)
 だがユピテルは、自分の雷電を運ぶ鳥以外に姿を変えるに相応し
 い鳥はいないと考えて、すぐに偽りの翼で空を打ってガニユメー
 デースをさらった。

これらの例から、*simulacra deorum*「神々の似姿」を「神々の変
 身した姿」と解釈し、そこから「鳥」を想起することは十分可能であ
 ると思われる。さらに、上に引用したように、その鳥は鷲や鷲であ
 ることから、アリアドネーが恐れるのももつともなものである。

さらにここでもし、*simulacra deorum* を *poetic plural* とし⁶⁴、
simulacrum dei「神の似姿」と同義であると考え、なおかつ *dei* が換
 称 (*antonomasia*) としてユピテルを表していると解釈するなら、
 95: *simulacra deorum* は「神 (ユピテル) の似姿」として「鷲」
 と特定できるかもしれない。

そうでなくても、特にこの鷲は、*regia ales*「王の鳥」⁶⁵や *Iouis ales*
 「ユピテルの鳥」⁶⁶とも表現され⁶⁷、*avis* や *uolucris* と違って大き
 な鳥を指す⁶⁸*ales* で表現されることが多い。この *ales* という語で思
 い出されるのが、以下の Catul. 64.152-3 である。

6.3.3. カトゥッルス第 64 歌のパラフレーズから

pro quo dilaceranda feris dabor alitibusque
 praeda, neque iniacta tumulabor mortua terra. (Catul. 64.152-3)
 そのせいで私は、餌食として引き裂かれるべく、獣や鳥に与えられ

⁶⁴ *lupos*(86), *leones*(85), *phocas*(87), *gladios*(88)も *poetic plural* であるとも考えるこ
 とができる。

⁶⁵ Ovid. Met. 4.362.

⁶⁶ Verg. Aen. 1.394, 12.247, Ovid. A. A. 3.420, Met. 6.517.

⁶⁷ cf. Thompson(1936), 3-4.

⁶⁸ OLD s. v. 1.

ることになるでしょうし、死んだ後も土をかけて埋葬されることもないでしょう。

ここでアリアドネーは、自らがテーセウスを助けたにもかかわらず、そのせいで (pro quo) 自分は無人島に見捨てられ無残に死ぬのだと訴える。この 152-3: pro quo dilaceranda feris dabor alitibusque / praeda という表現が、Her. 10.79-98 と関連しているということ自体はこれまで指摘されている⁶⁹。だが、Her. 10.79-98 においては ales 「鳥」への言及はなされていないということは、これまで指摘されていない。しかし、Her. 10.79-98 が Catul. 64.152-3 のパラフレーズであると考えらるなら、95: caelum restabat: timeo simulacra deorum. においてアリアドネーが恐れているのは、79-98 における他の箇所でもまだ言及されていない ales 「鳥」であると考えるのは妥当であろう。ただし、ここでこのようなパラフレーズを想定すると、二つの問題が生じる。

第一に、95 で鳥を恐れているとするのなら、続く 96: destituor rabidis praeda cibusque feris.における rabidis feris「獐猛な獣たち」が「鳥」も含意しうることである。名詞 fera および ferus 自体に、「鳥」の意味は含まれていない。しかし、96: feris を形容詞 ferus の名詞的用法と考えれば、ferus は獣だけでなく鳥にも用いられる形容詞である⁷⁰ので、鳥を含意することは可能であろう。このことから、96: rabidis feris は猛禽類をも示唆しうるといえる。ただし、ここでは便宜的に 96: feris を「獣たち」と訳すことにする。

第二の問題は、なぜここでオウィディウスは、Catul. 64.152 の ales を simulacra deorum という迂言的な表現でパラフレーズしているのか、ということである。単純にもっと直接的な表現で、「鳥を恐れる」と書けばよいのではないか⁷¹。そこで以下においては、Her. 10 の他の箇所でもどのように Catul. 64 はパラフレーズされているかを検討し、その特徴を導き出す。

まず、テーセウスに見捨てられて呆然とするアリアドネーの様子の描写に、バックイを引き合いに出す箇所を見る。

saxea ut effigies bacchantis, prospicit, ... (Catul. 64.61)
あたかもバックイの石像のように、(テーセウスを) 眺める。

aut ego diffusis erravi sola capillis,
qualis ab Ogygio concita Baccha deo;
aut mare prospiciens in saxo frigida sedi,
quamque lapis sedes, tam lapis ipsa fui. (Ovid. Her. 10.47-50)

私はまるでテーバイの神に鼓舞されたバックイのように、髪を振り乱してひとりさ迷いました。あるいは海を眺めながら凍えて岩に座りました。座った所が石であったように、そのように私自身も石に

⁶⁹ Anderson, ad loc., Palmer, ad loc., Knox, ad loc., Barchiesi(2001), 20, Fordyce, ad loc.

⁷⁰ OLD s.v. 1.

⁷¹ 例えば、95 を caelum restabat, timeo nisi rostra uolucrum とでもすれば、韻律にあった形で鳥を恐れることを表現できる。

なっていました。

ここでは、Catul. 64 で単に「バックイの石像のように」としている表現が、Her. 10 では「バックイのように」と「石のように」と分けてパラフレーズされていることが窺える。

次は、テーセウスを、人間以外のものから生まれたのだと言って、恋人の冷たさを罵る常套的な表現でなじる箇所である。

quaenam te genuit sola sub rupe leaena,
quod mare conceptum spumantibus exspuit undis,
quae Syrtis, quae Scylla rapax, quae uasta Carybdis? (Catul. 64.154-6)
あなたを荒寥とした岩場で生んだのはいったいどんな雌獅子でしょう。どんな海があなたを孕んで泡立つ波から吐き出したのでしょうか。どんなシュルティスが、どんな食欲なスキュッラが、どんな巨大なカリュブデイスがあなたを生んだのでしょうか。

nec pater est Aegeus, nec tu Pittheidos Aethrae
filius; auctores saxa fretumque tui! (Ovid. Her. 10.131-2)⁷²
あなたの父親はアイゲウスではありませんし、あなたはピッテウスの娘アイトラーの息子でもありません。岩地と海峡があなたを生んだのです。

ここでは、Catul. 64 でテーセウスを生んだものとして具体的に長々と挙げられる例が、Her. 10 では簡潔で単純な表現にパラフレーズされている⁷³。

最後に、自らが埋葬されないことを嘆く箇所を見る。Catul. 64 では、先に引用した 153: neque iniacta tumulabor mortua terra.である。これが Her. 10 では、

ergo ego nec lacrimas matris moritura uidebo,
nec, mea qui digitis lumina condant, erit?
spiritus infelix peregrinas ibit in auras,
nec positos artus unguet amica manus?
ossa superstabant uolucres inhumata marinae?
haec sunt officiis digna sepulcra meis? (Ovid. Her. 10.119-24)
それでは私は死に際して母の涙を見ることもなく、指で目を閉ざしてくれる人もいないのでしょうか。不幸な魂は異国の空へと行き、置かれた遺体に友の手が香油を塗ることもないのでしょうか。遺骨は埋葬されず、その上に海鳥どもがたかるのでしょうか。これらが私の奉仕に相応しい墓なのですか。

⁷² Knox はこの distich を 110 の次に置く。

⁷³ なお、この Her. 10.131-2 については、類似した表現として、Hom. Il. 16.33-5: νηλεές: οὐκ ἄρα σοί γε πατήρ ἦν ἱππότα Πηλεΐδης / οὐδὲ Θέτις μήτηρ, γλαυκὴ δὲ σε τίκτε θάλασσα / πέτραι τ' ἡλίβατοι, ὅτι τοι νόος ἐστὶν ἀπηνής. を挙げることができる。この表現は、オウィディウスが Catul. 64.154-6 をパラフレーズするにあたって手本となった可能性がある。cf. Knox, ad loc.

というようにパラフレーズされている。ここでは Catul. 64 で簡略にしか述べられなかったことが、具体的かつ詳細に述べられていると見なすことができよう。

以上の検討から、Her. 10 では、Catul. 64 で詳細に述べられたことは簡潔に、簡潔に述べられたことは詳細にパラフレーズされているという傾向が読み取れる。実際、Catul. 64.152-3 が Her. 10.79-98 で長々とパラフレーズされているわけである。そこでオウィディウスは、アリアドネーが空からの恐怖として鳥を恐れる内容を表現するにあたって、Catul. 64.152 の ales という簡潔な表現は用いずに、simulacra deorum と遠まわしにパラフレーズしたということができるのではないだろうか。

7. 結論

以上から、本論稿での考察に基づく Her. 10.79-98 のテキストと訳は以下のようになる。

{nunc ego non tantum quae sum passura recordor, sed quaecumque potest ulla relictā pati.}	80
occurrunt animo pereundi mille figurae, morsque minus poenae quam mora mortis habet.	
iam iam uenturos aut hac aut suspicor illac, qui lanient auido uiscera dente, lupos.	
forsitan et fuluos tellus alat ista leones.	85
quis scit an et saeua tigride Dia uacet?	
et freta dicuntur magnas expellere phocas!	
quid uetat et gladios per latus ire meum?	88
si mare, si terras porrectaque litora uidi,	93
multa mihi terrae, multa minantur aquae.	
caelum restabat: timeo <u>simulacra deorum</u> .	95
destituor rabidis praeda cibusque feris.	
sive colunt habitantque uiri, diffidimus illis:	
externos didici laesa timere uiros.	98
tantum ne religer dura captiua catena,	89
neue traham serua grandia pensa manu,	90
cui pater est Minos, cui mater filia Phoebi,	91
quodque magis memini, quae tibi pacta fui!	92

{今や私は、これから耐え忍ぶであろうことだけでなく、捨てられた女の誰もが耐え忍ぶはずのことを思います。} 心には千通りの死のかたちが浮かびます。死を待つことよりも、死ぬことの方が苦しみは少ないのです。今にも、こちらからか、あちらからか、食欲な牙で内臓を引き裂くような狼がやって来るのではと想像します。この土地なら褐色の獅子も育むかも知れません。ディーアには残忍な虎もいないと誰が分かるのでしょうか。海もまた巨大な海豹を打ち上げると言われています。そして剣魚が私の脇腹を刺し貫くのを何が防いでくれるのでしょうか。海を見るたび、陸に延びた岸边を見るたび、陸の多くが、海の多くが私を脅かします。空が残っていました

が、私は神の似姿を恐れます。私は獐猛な獣たちの餌食として見捨てられるのです。もし男たちが耕作をし、住んでいたとしても、私はその人たちを信じません。傷つけられて、異国の男たちを恐れることを学びましたから。捕らわれの身となって堅い鎖に繋がれるということだけにはなりませんように。また、隷属の手で大きな糸玉を紡ぐということがありませんように。私の父はミーノースで、母はポエブスの娘であり、より強く覚えていることですが、私はあなたと契りを交わしたのですから。

本論稿では、「空の生物を恐れるという文脈」・「神の変身した姿としての鳥」・「カトゥルルス第 64 歌のパラフレーズ」という視点から、95: *simulacra deorum* が「鳥」、とりわけ「鷺」を婉曲に表現しているという解釈を提示した。しかし、依然として *simulacra deorum* というフレーズで、「神の似姿」から「鳥」という内容を表すことができるのかという問題は残る。*Bibliotheca Teubneriana Latina* などの検索ソフトで探してみても、そのような例はなかった。しかし、*simulacra* を「彫像」としても「幻影」としても「星座」としても問題がある以上、文脈と *Catul. 64* のパラフレーズを重視して、95: *simulacra deorum* は「鳥」を婉曲に表現しているとするのが最も妥当な解釈案であると思われる。

また本論稿では、88: *gladios* は剣魚であるとも解釈するので、結局 *Her. 10. 79-98* においてアリアドネーは、魚・鳥・獣に食い殺されるのを恐れているのだということができる。ここで、このような魚・鳥・獣に食われることの恐怖は、『オデュッセイア』第 24 巻における、オデュッセウスはもうどこかで死んでしまっていると思って嘆くラーエルテースの、

... ὃν που τῆλε φίλων καὶ πατρίδος αἴης
 ἥε που ἐν πόντῳ φάγον ἰχθύες, ἢ ἐπὶ χέρσου
 θηρσὶ καὶ οἰωνοῖσιν ἔλωρ γένετ'... (Hom. *Od.* 24.290-2)
 息子は親しい人々や祖国から遠く離れたどこかで、海ならば魚に食い尽くされ、陸ならば鳥や獣の餌食となったのだ。

という言葉からも読み取ることができる。このような魚・鳥・獣に食われてしまうという恐怖は、祖国から離れたままで死ぬかもしれないと思う者の抱く、共通の恐怖なのかもしれない。

引用文献

- Anderson, J., N., *On the sources of Ovid's Heroides I, III, VII, X, XII.* Berlin 1896.
 Armstrong, R., *Cretan women : Pasiphae, Ariadne, and Phaedra in Latin poetry.* Oxford 2006.
 Barchiesi(1989): Barchiesi, A., Postilla (su Ov. her. 10, 89-95). *MD* 23, 173-4.
 Id.(2001): Continuities. in *Speaking Volumes: Narrative and Intertext in Ovid and Other Latin Poets.* London, 9-28 (orig.,

- Pioblemi d'interpretazione in Ovidio: continuità delle storie, continuazione dei testi. *MD* 16(1986), 77-107.
- Battistella, C., Le 'constellazioni' di Arianna (Ov. Her. 10, 95 e Apoll. Rhod. 3, 997-1004). *MD* 57(2007), 217-222.
- Burmann, P. et al., *P. Ovidii Nasonis opera: cum notis Bentleii hactenus ineditis, necnon Harlesii, Gierigii, Burmanni, Lemairii, et aliorum selectissimis*. London 1825.
< <http://books.google.co.jp/books?id=qAQQAA AAIAAJ> >
- Dörrie, H., *P. Ovidii Nasonis Epistulae Heroidum*. Berlin and New York 1971.
- Fordyce, C. J., *Catullus*. Oxford 1961.
- Hauptli, B. W., *Liebesbriefe. Heroides epistulae*. Zürich 1995.
- Hewig, A., Ariadne's Fears from Sea and Sky (Ovid, *Heroides* 10.88 and 95-8). *CQ* 41(1991), 554-556.
- Jacobson, H., *Ovid's Heroides*. Princeton 1974.
- Jolivet, J. -C., *Allusion et fiction épistolaire dans les Héroïdes: Recherches sur l'intertextualité Ovidienne*. Paris-Rome 2001.
- Knox, P. E., *Ovid, Heroides: select epistles*. Cambridge 1995.
- Landolfi, L., *Scribentis Imago: eroine ovidiane e lamento epistolare*. Bologna 2000.
- Marg, W., Ovid, *Heroides* 10, 95/96. *Hermes* 88(1960), 505-506.
- Palmer, A. P., *Ovid, Heroides*. new introduction and bibliography by D. F. Kennedy. 2 vols. Exeter 2005(Oxford 1898, 1967).
- Paolicchi, L., *Ovidio Eroidi*. Roma 2004.
- Peters, G., *Observationes ad P. Ovidii Nasonis Heroidum Epistulas*. diss. Leipzig 1882.
< http://www.archive.org/stream/4737333/4737333_djvu.txt >
- Reeve, M. D., Notes on Ovid's *Heroides*. *CQ* 23(1973), 324-338.
- Rosati, G., *Ovidio Lettere di Eroine*. Milano 2008⁵(1st ed. 1989).
- Salvadori, E., *Ovidio Eroidi*. Milano 2006²(1st ed. 1996).
- Smith, R.A., Fantasy, Myth, and Love Letters: Text and Tale in Ovid's *Heroides*. *Arethusa* 27(1994), 247-73.
- Spoth, F., *Ovids Heroides als Elegien*. München 1992.
- Stégen, G., Ovide, Her., X, 94-95. *Latomus* 19(1960), 360.
- Tarrant, R. J., Two Notes on Ovid, *Heroides* X. *RhM* 128(1985), 72-75.
- Thompson(1936): Thompson, D. W., *A glossary of Greek birds*. London.
- Id.(1947)., *A glossary of Greek fishes*. London.
- Valpy, A. J., *P. Ovidii Nasonis Opera omnia*. London 1821.
< <http://books.google.co.jp/books?id=Bx4OAAAAYAAJ> >
- Verducci, F., *Ovid's toyshop of the heart: Epistulae heroidum*. Princeton 1985.
- Volk, K., Timeo Simulacra Deorum (Ovid, *Heroides* 10.95). *Mnemosyne* 56(2003), 348-353.
- 高橋宏幸『ギリシア神話を学ぶ人のために』世界思想社, 2006.
(京都大学)